『三四郎』美禰子の作戦

Junko Higasa

小川三四郎は、車中で出会った見知らぬ女が言った通り、故郷の母が心配する通り、度胸のない男である。それを見抜いた美禰子は、乱暴にも無理やり三四郎の中から度胸を引き出して騎士に仕立てようとした。

美禰子はまず、池の端で自分に見とれる三四郎を見出した。その瞬間、美禰子は、自分が恋する野々宮への「さや当て」騎士として三四郎を認定した。目の前に落とした白い花は、美禰子自身も量ることのできない運命の「受難証」である。

美禰子は、あらゆる場面で、それとなく三四郎の恋愛感情を駆り立て、度胸を発揮するように仕向けるが、生真面目で臆病の殻からなかなか抜け出せない三四郎は、思う通りに先へ進んではくれない。結婚を促される時期にいる美禰子は、空高く流れる白い雲を眺めるのが好きである。先進的知識を持つ自分の人生もまたそうあらねばならない。そこで第一候補である野々宮と、第二候補である三四郎を意識上で戦わせることによって、自分の結婚時期を出来るだけ早めようとするのである。

美禰子は、菊人形観覧を逃れて三四郎と二人きりになったとき、自分の状況をそれとなく話すが、三四郎は鈍い。そして今度は運動会を逃れて築山で二人きりになる。『（野々宮さんが）「先刻(さっき)あなたの所へ来て何か話していましたね」「会場で」「ええ、運動場の柵の所で」と云ったが、三四郎はこの問を急に撤回したくなった。女は「ええ」と云ったまま男の顔を凝(じっ)と見ている。少し唇を反らして笑い掛けている』美禰子は三四郎をもうひと押しする。『あなたは未だこの間の絵葉書の返事を下さらないのね』すなわち「迷える羊を救いに来て下さらないのね」である。この「二人きり」が「男が女に負ける状況」であるが、臆病な三四郎は反応しない。美禰子は野々宮を讃辞してみる。しかし三四郎は『自分と野々宮を比較してみると大分段が違う』(第六章)とあっさり自信を失くす。『あの時は気が付かなかったが、今解釈してみると、故意に自分を愚弄した言葉かも知れない』『今日まで美禰子の態度や言語を一々繰返してみると、どれもこれもみんな悪い意味が付けられる』と、前進どころか後退する。

美禰子の作戦は一向にはかどらない。そこで与次郎の借金補填のために三四郎を呼び寄せる。里見の館を訪ねた三四郎は「シャロットの女」の如き美禰子と鏡の中で対面する。『とうとういらしった』しかしここでも意思疎通がうまくいかない。帰る三四郎と一緒に表に出た美禰子は、貸与金以上の金を自分の預金口座から三四郎に引き出させて預ける。それは結婚持参金であり、それを放出することは時間稼ぎである。

そして展覧会の招待券が二枚あるからと三四郎を誘い、写実画家である吉田博、ふじを(義妹で妻)の作品を観る。「ヴェニス」の風景で印象的なのは、牢獄へ続くため息橋(Ponte dei Sospiri)であるが、そこを渡ったが最後、すべて有罪にされる運命である。

その時、偶然現れた原口画伯の後ろに野々宮の姿を認めた美禰子は、咄嗟に三四郎に耳打ちして、男たちの心を乱そうとした。しかし美禰子には野々宮も三四郎も愚弄する気はなかった。ところが理解に乏しい三四郎には通じない。そして美禰子は、その昔、ため息橋を渡った人と同様、その釈明を一切受け入れてもらえず、三四郎の一方的審判は下った。ため息橋を渡ると、もう雲を眺めることはできない。(2014.5.27)